

ギリギリ

2022. 2. 1

まだ教諭だった頃の話である。出張があると、時間に間に合うかどうかというギリギリの時間に学校を出ていたことが多かった。車を運転しながらも焦る。こういうときに限って、信号が赤になる。渋滞になる。どうにかこうにか会場に到着する。来るのが遅いため、駐車場が空いていないこともある。また、焦る。こんなことが一度あれば、もうこりごりとなればいいのだが、そうはいかない。また、同じことを繰り返す。そんな人だった。

車を運転する。ガソリンの給油メーターが半分よりも下にいく。もうそろそろガソリンスタンドに行くかという行かない。メーターの一番下のメモリまでくる。それでもスタンドには行かない。エンブレランプが点灯する。それでも行かない。そろそろ限界かとなって、ようやくスタンドに行く。「〇〇リッターです」「おお、そんなに入ったか」と満足する。

こういう生活をしていると、痛い目にあうことがある。旅行に行く。山道である。いつもの調子で給油もしないままに山に来てしまった。スタンドがない。だんだん焦ってくる。エンブレランプが明るく点灯している。「こんなところで、止まったらどうなるんだ」本気で焦ってくる。家人との会話もないままに、なるべく燃費が良い運転を心がける。すると、遥か彼方に、ガソリンスタンドらしき看板が見える。「助かった」

今思うと、どうしてあんなにギリギリにこだわっていたのか。ギリギリを楽しんでいたのか。スリルがたまらなかったのか。そんなことはないと思うのだが、自分が嫌になるほどだった。学習しないのである。教訓というものを知らない。

ところが、教頭になってから変わった。出張では、絶対に遅れないように学校を出る時間を設定した。急に電話がきたり、お客さんがきたり、先生方から相談されたりと、何が起きるかわからない。余裕をもって動けるようにしていた。ギリギリ人間も、立場が変わると変わるものである。性格は変わらないが、行動は変わる。

校長になった。さらに余裕をもって行動するようになった。会場に早く着いてしまうのが当たり前になっている。校長は誰も遅れてこない。駐車場で、少し時間をつぶすくらいでよい。ギリギリ人間も、すっかり変わってしまった。

11:00開店の店を目指す。10:30に着いてしまう。一番乗りのときもある。せっかく並んだのに、一回目で入店できないと、だいぶ待つようになる。そうなるよりはいいかと、30分間待つ。こんなことが、今では当たり前になっている。昔のギリギリ人間は、どこかにいつてしまっている。

もう、あのギリギリのドキドキ感は味わいたくない。もうギリギリ人間には、戻りたくない。ガソリンが切れる寸前の山道でも、開店を待つ駐車場でも、助手席の家人は文句の一つも言わない。だが、何かは言いたそうである。わかってはいる。程よく行動できればいいということだろう。それが難しい。今となっては、ギリギリ人間の生活が懐かしい。